

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520067

研究課題名（和文） 近代日本における「神」の比較宗教史的研究—戦前から戦後までの制度と思想—

研究課題名（英文） A Comparative Study of the Idea of God in Modern Japan

研究代表者

奥山 倫明（OKUYAMA MICHIAKI）

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：30308928

研究成果の概要（和文）：近代日本においてキリスト教布教が再開されるなかで、かくれキリシタンの伝統を継ぐ長崎ではキリシタン、また布教の再開されたキリスト教諸教派の新たな展開が見られる。そうした地域におけるフィールドワークによって独特な文化変容への理解が得られた。また近代日本においてキリスト教知識人は日本の社会、国家、ナショナリズムとの対決を迫られる時代を迎えるが、その思想的な営みの比較思想的考察からは、特に現世における教会のあり方をめぐる教会論が注目すべき主題であることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In modern Japan, Christian missionaries were readmitted under a new policy of the state, while Christians who had hidden underground in the premodern era reemerged on the surface of society. These hidden Christians had experienced their own cultural transformations up until then, and have also experienced them since, and sound anthropological fieldwork has been conducted on this. On the other hand, new Christian intellectuals in modern Japan had to confront society, the nation, and the nationalism of Japan. Their thoughts on the Church in this world, therefore, have become important subjects that a comparative study of intellectual history needs to address.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教史、キリスト教、神道

1. 研究開始当初の背景

近代宗教学が、「宗教」概念の成立と並行して形成されてきたこと、すなわち「宗教」概念自体の近代西洋的な背景と、近代宗教学の同じく近代西洋的な背景について、近年、学史的な反省が加えられつつある。近代日本

においては、西洋世界との再邂逅の過程で God の訳語としての「神」の採用は複雑な思想的諸問題を引き起こし、今日にまで及んでいる。一方、キリスト教と本格的に相対峙するのと並行して近代的な諸制度を整備する過程において、「宗教」もまた、「信教の自由」

の実現という形で法制度上、また思想上の位置づけを見るにいたった。もっとも、その間、国家・国民統合のための精神的支柱—西洋におけるキリスト教に相当するもの—の樹立を目指す国の指導層は、在来の神社を国家制度のうちに組み込むことを目指し、そのために神社非宗教説を掲げた。しかしながら、神社、神道、宗教のそれぞれの関係には当然、截然としないところがあり、第二次世界大戦の時期にいたるまで、とりわけ国民への神社参拝の強制的な実施をめぐる、折々に疑義が呈された。

近代日本宗教史にかかわる制度的、概念的諸問題に関するこうした理解の上で、本研究代表者は、過去数年のあいだ、近現代日本における宗教と関連法制にかかわる問題についての考察、「神道」の制度史的・概念史的な諸問題についての考察、近代創建神社の一つ、靖国神社の成立の経緯、その戦後の状況、関連する諸問題の背景についての考察、昭和前期から占領期にいたる日本のキリスト教をめぐる諸状況についての考察などを進めてきた。こうした研究の蓄積のなかで、日本のキリスト教（思想史的・宗教哲学的研究、民俗学的研究）を専門とする研究分担者との共同研究として、本研究計画を立案した。

2. 研究の目的

西洋由来の「宗教」概念が近代西洋的諸制度とともに導入された近代日本では、西洋キリスト教という宗教の一つのモデルとの対峙の上で、国内の文化社会状況から析出された諸宗教が制度的な位置づけを得ることになる一方で、国家の宗祀としての神社祭祀は、国家制度としての異なる扱いのなか、敗戦にいたるまでの宗教史が展開した。本研究は、特に大正・昭和前期から戦後期までに焦点を絞り、神社神道とキリスト教という、異なる「神」を中心に展開してきた二つの現象をめぐる、それぞれの制度史・思想史を比較考察しながら、近代日本宗教史に内包される緊張関係を抽出することを目指す比較宗教史的研究である。

3. 研究の方法

本研究の遂行に当たり、中心となるのは文献研究である。大正から昭和前期、占領期にかけての宗教史関係の図書の収集と分析を進めるとともに、新たな資料の探索、収集と分析も実施する。神道の制度と思想の分析に当たっては、宗教学・宗教史学的手法に加えて、宗教社会学・宗教学、社会思想史・政治思想史研究の方法論も援用する。またキリスト教の制度と思想にかかわる新資料探索と関連調査のための、研究出張も実施する。

このうち逢坂元吉郎の関連資料の調査、分析に当たっては、宗教思想史・宗教哲学的考察から、さらに比較文明学的な考察への展開を目指す。「キリシタン神社」に関しては、宗教人類学的・宗教民俗学的方法による現地調査を実施する。さらにロシア正教会について、政教関係に焦点を当てた宗教社会史的な資料調査を実施する。最終的に、近代日本における「神」の比較宗教史的研究として、総合的な検討を加える。

4. 研究成果

(1) 2010 年度

近代創建神社として重要な、神戸市の湊川神社の訪問見学（2011年1月2～3日）を実施した。これは天皇の忠臣を顕揚するための新たな神社として創建された近代創建神社として最も古い神社であり、別格官幣社制度の嚆矢となった。いわゆる国家神道について考察する上で重要な位置を占める。また近代天皇崇敬の興隆、強化を目指して建立された、近代創建神社（近江神宮、平安神宮、樞原神宮）の訪問見学を実施した（2011年3月19～21日）。

他方、カトリックを中心にキリスト教の伝統の濃厚な長崎における原爆被災地、慰霊追悼施設、さらにキリスト教関係施設の訪問見学を実施した（2011年1月23～26日）。

また本プロジェクトの研究会として12月17日にムンシを発題者として「キリシタン神社の歴史と現状—日本人の宗教観に触れて—」、2011年1月21日に研究協力者アリョーナ・ゴヴォルノワを発題者として「「日本精神」と「正教神性」—日本における正教の土着化の諸問題をめぐる—」と題する発表が行われた。

(2) 2011 年度

2011年度は、研究グループメンバーを発題者とする2回の研究会と、外部講師を招いて実施した1回の研究会を開催した。6月24日開催の研究会は、奥山倫明を発題者として、「近代日本のキリスト教をどう見るか」と題して開催された。さらに10月21日には、寺尾寿芳を発題者として、「逢坂元吉郎の主体論」と題して開催された。これらはともに近代日本のキリスト教史に関して再考を試みる内容である。

次いで、12月16日には、上越教育大学、畔上直樹准教授をお招きし、「近代神社と宗教ナショナリズム—畔上直樹氏の近著をめぐる—」と題して、研究会を開催した。これは最近、国家神道をめぐる議論との関係で活発に研究成果を発表されている畔上氏の業績に関して、批判的に検討する目的で設定された研究会である。当日は、奥山が近年の

国家神道論と照らし合わせて、また南山宗教文化研究所の栗津賢太研究員が宗教ナショナリズムをめぐる議論と照らし合わせて論点を提示し、それに対して、畔上氏にリプライをしていただいたのち、フロアとともに議論を深めた。なおこの研究会の議論の内容は、『南山宗教文化研究所 研究所報』22号に掲載した。

また本プロジェクト関連の調査等としては、2011年10～11月にムンシが長崎調査を実施した。さらに研究協力者アリョーナ・ゴヴォルノワが、8月に北海道調査を実施した。同調査では、札幌ハリストス正教会、小樽ハリストス正教会、苫小牧ハリストス正教会、函館ハリストス正教会を訪問見学したほか、予備的な質問紙調査も行なった

(3) 2012年度

本年度は代表者、分担者、研究協力者、さらに研究課題に関心をもつその他の研究者を含めて、近年刊行された基本文献についての連続研究会を開催し、近代日本宗教史における神の位置について検討を深めたほか、研究協力者の研究発表会も開催、さらに代表者、分担者による調査、研究発表等を実施した。

奥山による、近代日本宗教史における神道史、またそれとキリスト教史の対比については、近年の国家神道論の批判的検討を論文として発表したほか、国際学会における2回の発表を実施した。一つ目の発表では、神道史の位置づけについては、特に同じ文脈における儒教史の位置づけとの対比のなかでの特色を検討し、それぞれと「宗教」概念との関係について検討した。二つ目の発表では、日本キリスト教史における特色ある都市として長崎に焦点を当て、原爆投下の背景としての同地のキリスト教の状況とその後の対応のキリスト教的な側面について検討した。

また寺尾の研究においては、まず文献調査研究を主に、逢坂元吉郎の思想およびその射程域の闡明に努めた。特に今年度は逢坂の宣教活動における、教会形成に着目して、その教会論の独自性を明確化しようと試みた。

またムンシの長崎県のキリシタン神社の研究においては、大祭礼の歴史と現状をふまえた上で地域社会の宗教観を考察することを目指し、キリシタン神社が各地でどのように受け止められているかを検討した。

(4) まとめ

以上の研究を通じて、寺尾は逢坂元吉郎による合同教会論批判の基礎にある「主体」理解を、逢坂が多大な影響を受けた師である西田幾多郎、さらにはその弟子であり、逢坂と同じく主体について独自の主張を唱えた三木清との異同を比較研究的に明らかにした。さらに逢坂が国家主導の合同教会論を批判

する際に最重要の概念となった公会主義を対象に研究を進め、逢坂が近代批判とロマン主義的傾向をとともに内包しながらもイデオロギックな変質を回避した回路を明らかにした。そこでは聖体の「弱さ」こそが逆説的に原言語的な存在的豊かさの記憶につながり、極大である教会と極小である修禱とを接合するとともに、さらにはその視点が「文明の衝突」回避に有益な方向性をもつ点を示した。

またムンシはキリシタン神社に関するフィールドワークを繰り返し実施し、地域社会の歴史的・文化的背景に関する理解をふかめ、また宗教観を考察しながら、それぞれの神社に関する具体的な研究成果を上げてきている。すなわち、伝統的な民間信仰による祖先崇敬の手段としての「神社」という名称を借用したキリシタンが、神社を設立維持してきたなかで、地域社会におけるその神社の認識にも差異が生じている。しかしながら、またその神社が、かくれキリシタンと当該地域の住民とを結び付ける精神的な拠点の役割を果たしていることも明らかにした。

さらに奥山による、近代日本の宗教制度史のなかにおける神道とキリスト教の位置づけをめぐる研究と併せ、以下のような見通しを得ることができた。近代日本においてキリスト教が禁止から黙認へと制度上の扱いが変化したなかで、かくれキリシタンの伝統を継ぐ地域におけるキリシタン、また布教の再開されたキリスト教諸教派の新たな展開が見られる。人類学的・民俗学的フィールドワークによって独特な文化変容への理解が得られ、そうした調査研究のいっそうの伸展が期待される。また近代日本における新たなキリスト教の展開のなかで、キリスト教知識人は日本の社会、国家、ナショナリズムとの対決を迫られる時代を迎えるが、その思想的な営みの比較思想的考察もまた重要な意義を有する。また現世における教会のあり方をめぐる教会論も、とりわけ注目すべき主題であることが明らかとなった。今後はさらにカトリック、プロテスタントに加え、正教会の歴史的展開についてもいっそうの調査研究を進め、宗教社会学的な視点、方法も加味しながら、近代日本における「神」の比較宗教史的研究を展開していけるよう改めて研究体制を構築したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 寺尾寿芳、魂の覚醒—自覚的応現と回心的影現—、聖書と宗教、査読有、3号、2013、掲載決定

- ② ロジェ ヴァンジラ ムンシ 枯松神社と祭礼—地域社会の宗教観をめぐって—、人類学研究所研究論集、査読無、1号、2013、83-113
- ③ 奥山倫明、近年の「国家神道」論から見た畔上直樹氏の貢献、南山宗教文化研究所所報、査読無、22号、2012、6-20
- ④ 寺尾寿芳、(研究ノート)逢坂元吉郎の神学思想—主体をめぐる京都学派との対比、聖書と宗教、査読有、2号、2012、1-10
http://www.bibleandreligions.net/wp-content/uploads/2012/05/SSBR2_P1-10.pdf
- ⑤ Roger Vanzila Mumsi, Japanese Hidden Christian in Contemporary Settings, SMT-Swedish Missiological Themes, 査読無、100/4、2012、351-390
- ⑥ Roger Vanzila Mumsi, Conversion Experiences among the Kakure Kirishitan, The Japan Mission Journal, 査読無、65/3、2011、62-83
- ⑦ Michiaki Okuyama, “State Shinto” in Recent Japanese Scholarship, Monumenta Nipponica, 査読有、66/1、2011、123-145

[学会発表] (計10件)

- ① Michiaki Okuyama, Religious Responses to the Atomic Bomb in Nagasaki, World War II and Religion Conference, 2012年12月1日、Florida State University, U. S. A.
- ② 寺尾寿芳、逢坂元吉郎の公会主義、比較文明学会、2012年11月18日、京都大学
- ③ Roger Vanzila Mumsi, Conversation Experiences among the Kakure Kirishitan, American Academy of Religion, 2012年11月17日、Chicago, U. S. A.
- ④ 寺尾寿芳、内観と悲哀、日本宗教学会、2012年9月9日、皇学館大学
- ⑤ 寺尾寿芳、実存協同と二重世界内存在、上智人間学会、2012年8月31日、白百合女子大学
- ⑥ Michiaki Okuyama, Religion and Non-religion in the Modern Japanese

Context, European Association for the Study of Religion, 2012年8月26日、Sodertorn University, Stockholm

- ⑦ Roger Vanzila Mumsi, Japanese Hidden Christian in Contemporary Settings, Religion in Interspaces, Lund Mission Studies Open Seminar, 2012年3月20日、Lund University, Sweden
- ⑧ 寺尾寿芳、逢坂元吉郎の身体論、日本宗教学会、2011年9月4日、関西学院大学
- ⑨ ロジェ ヴァンジラ ムンシ 日本におけるイエズス会の宣教と五島のキリシタン、日本ナイル・エチオピア学会、2011年4月23日、長崎大学
- ⑩ Roger Vanzila Mumsi, Kakure Kirishitan in the Urbanized Context of Kurosaki, Association for Asian Studies, 2011年3月31日、ホノルル、アメリカ合衆国

[図書] (計3件)

- ① 寺尾寿芳、他、方丈堂出版、(高田信良編) 宗教における死生観と超越、2013、250-272頁
- ② 寺尾寿芳、他、早稲田大学出版部、(鈴木健夫編)「越境」世界の諸相—歴史と現在、2013、発行確定
- ③ ロジェ ヴァンジラ ムンシ 聖母の騎士社、村上茂の伝記—外海・黒崎のかくれキリシタンの指導者、2012年、285頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥山 倫明 (OKUYAMA MICHIAKI)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：30308928

(2) 研究分担者

寺尾 寿芳 (TERAO KAZUYOSHI)
南山大学・南山宗教文化研究所・研究員
研究者番号：00353095

ロジェヴァンジラ・ムンシ (ROGER VANZILA
MUNSI)
南山大学・外国語学部・准教授
研究者番号：10565386

(3) 連携研究者

なし